

特54

64

市村座狂言筋書
巻之六



深谷龜太郎

074750-001-5

特54-64

市村座狂言筋書

深谷龜太郎刊

M18-20

CEK-0012



市村座花見時瓢大閤記

○序幕 妙心寺引揚の場(二幕目) 蛙ヶ島
新開の場同羽柴陣營の場(三幕目) 高松城
切腹の場(四幕目) 羽柴方本陣の場同甲利
方本陣の場(大詰) 廣徳寺墓所の場同西宮
驛支道の場同廣徳寺門前の場

浄瑠璃北嵯峨別館の場

○序幕 常州浮島ヶ原の場同潮来玉屋の
場同真藏川岸の場(二幕目) 根本村農家の
場同廣野子別の場(三幕目) 信田家辻番の
場同家中小山宅の場同潮来宿玉屋の場同
堤下田浦の場

○序幕 常州浮島ヶ原の場同潮来玉屋の
場同真藏川岸の場(二幕目) 根本村農家の
場同廣野子別の場(三幕目) 信田家辻番の
場同家中小山宅の場同潮来宿玉屋の場同
堤下田浦の場

役割

| | | | |
|----------|-------|---------|--------|
| 清水長左衛門 | 市川左四次 | 番僧珍戒 | 中村鶴藏 |
| 安國寺惠盛 | 市川 | 原本記内 | 同 |
| 四王天但馬守 | 同 | 庄屋次郎右衛門 | 市川團右衛門 |
| 小山の下部與三次 | 同 | 鈴木越後 | 同 |
| 信田左門正 | 同 | 離波の妻お柳 | 河原崎國太郎 |
| 小山真三郎 | 坂東家橘 | 太助助女房お万 | 同 |
| 交野長政 | 市川海老藏 | 忠三郎母おすゞ | 同 |
| 離波傳兵衛 | 市川喜美藏 | 明智光秀 | 市川權十郎 |
| 大谷慶松 | 同 | 加藤虎之助 | 同 |
| 白井與三右衛門 | 同 | 菊川甚春 | 同 |
| 百姓太郎助 | 同 | 秋坂甚内 | 同 |
| 太郎作女房お千代 | 岩井松之助 | 羽柴秀長 | 同 |
| 白井妻お清 | 同 | 清水の奥方妻木 | 同 |
| 太郎助お千代 | 同 | 甲利照元 | 同 |
| 潮来玉屋の抱お玉 | 同 | 農夫太郎助 | 同 |
| 藤田傳八 | 同 | 曾根忠三郎 | 同 |
| 龍屋長兵衛 | 同 | 羽柴統前守秀吉 | 市川團十郎 |
| 牛窪九郎兵衛 | 同 | 堀尾茂助 | 同 |
| 仙石權兵衛 | 同 | 農夫太郎作 | 同 |
| 磯員左市郎 | 市川八百藏 | 家老荒川道之進 | 同 |
| 香属狐 | 同 | | (以下略ス) |
| 小山の若徒信三 | 尾上菊之助 | | |
| 玉屋小鳥 | 尾上桑次郎 | | |
| 忠三郎女房おあき | 尾上菊五郎 | | |
| 實の女化狐 | 同 | | |
| 牛窪の下部三平 | 同 | | |
| 玉屋小五 | 尾上榮之助 | | |

明治十八年三月廿七日御届○價上錢
日本橋區藥研堀町十八番地平民
編輯兼 深谷龜太郎
出版人 同演町三丁目壹番地
賣捌 元 五 六 堂



大閤記

五幕

○序幕 妙心寺引揚の場(二幕目) 蛙ヶ島
新開の場同羽柴陣營の場(三幕目) 高松城
切腹の場(四幕目) 羽柴方本陣の場同甲利
方本陣の場(大詰) 廣徳寺墓所の場同西宮
驛支道の場同廣徳寺門前の場

○本舞臺正面寺の大門此左右築地の
高城築り兵衛六人城を焚燒へ居る處へ(宗十郎)みすや長
兵衛風船敷包を取出來り急用がムり升れバ藤田様へ面會
が願ひ度是非其時門下され升と頼む(軍兵)伊家老の四
王院様よりの御通しと付通す事ハ罷成らぬト云ふ處へ門
内より藤田様出來り長兵衛を見て能こそ参たり拙者同
道致し参るべし(長)鎧の抜身の中は這入升もふさびでム
り升れバ此處てお人拂を(傳)成程左もわらん其方共の門
内へ這入(軍)皆々畏り候と這入跡長兵衛の兼て移頼みの
長崎行の旅仕度として品々を傳入お渡す(傳)本能寺の移勝
利より天下の主と成時の町人より通れお其方ゆゑ吉左右
を待々宜しいと詞バを約し長兵衛の悦び向ふへ這入(傳)
主人の云付は調へと旅行の用意ト立上る道具廻る
○本舞臺高二重正面白地面の襖都て妙心寺西院庭先の体
受ふ(權十郎)明智光秀下手ハ院主妙譽上人控へる(光)還

恨の散せしが主君織田殿を弑せし上り逆臣の名ののがれ
す武運は叶ひ將軍職の宣下有や退討の沙汰出るや朝
家は於ても御評議あらん免も角も逆賊の某しなれば
後世のためは祠堂金と受納下されと金包を出だし頼む
(上人)佛殿の織田殿を討れし神佛君よ託し天お代り弑
されたるも同然ゆる朝家よりも寛典の多少決めるべしと
金を受取上人の奥へ入跡光秀白紙を出し密書を認め手箱
に納め差添を抜切腹せんとする處へ奥より四王天但馬守
明石儀大夫共外出來り切腹を止め光秀の逆臣の名の退ぬ
ゆゑ自害するト云ふを但馬其外押して止め此機をはすらす
江州を責打筒井順慶細川忠興を身方お頼み天下をお納め
遊ませト諫める光秀は是よて死を止まる但馬以下悦ぶ
(光秀)藤田傳八を呼是よて傳八町人休の辨らへよて笠を
持出來るを皆々見て驚く光秀の密書を渡す藤田の悦び明
後四日の晝頃おの中國へ着すでムり升と拜をして向ふへ
這入但馬以下の奥へ這入跡(光)自弑と見せうけ探りみし

は逆意の汚名を厭す四海を納めん臣等が進め我大望の時節来れりと悦ぶ爰へ奥より細川家々のお使者として内室参りしより升る(光)何姫が参りしは是へとせし詞のした細川忠興の室玉照出来り光秀の機嫌を伺ひ文箱を出し密事ゆゑ私くしよお使を命せられた(光)左もあらんと文箱を開文意を讀みし思興の逆臣は同意せぬ勿論姫を離別するため送り歸せしとい我を恥かしめし不埒の忠興今も思ひ知らせんと怒る玉照の忠興の不實を欺く爰へ奥より筒井家へ参りし使者薄尾庄兵衛院致しまたたと案内と供み庄兵衛出来り(庄)筒井家へ参りし處殿は此程が病氣かから快氣次第軍馬を催しはらば峠へ出陣の旨参りしより升る(光)日頃のよしみ頼母しき順慶ありと悦ぶ玉照の忠興を恨み死なんとするを侍女若芝が止る爰へ奥より馬守血汐の付し白綾の片袖を持来り光俊若信長公の参首を御詮議成れし處参首のあけれ共此片袖は血の染しし生密極りふりと差出す光秀の残念の思

ひ入よて刀を抜袖を貫く又但馬も同じく貫く事あつて幕二幕目 蛙ヶ鼻關所の場 本舞臺常足の二重板張の陣屋是へ白地へ桐の紋の幕を張廻し後ろ一面大河の雲割爰に軍兵四人立懸り居て軍場商人と笑しみの演詞有つて後向ふ方(松之助)順禮お千代子役太郎吉を連れ来り(千代)君方のお仲間河内在の百姓で太郎作とや者軍は参て居りませぬの(軍)數千人の其中で河内産れと云ふても知れぬがアノ旗持の八右衛門の權か河内の百姓だと聞いたゆゑ聞合して還るふと立上る處へ幕の内(海老藏)淺野彌兵衛出来り夫ハ人違ひとして河内産れの者ハ先月十八日冠り山の戦ひお戦死なせしが年齢ハ四十位と聞くとお千代太郎吉が扱も父ハ戦死せられしと歎く彌兵衛ハ懐中より金包を出しお千代は報酬し軍中ゆゑは夜お入らぬ内此場を立國元へ歸り佛事供養致すべし(千代)情の詞は涙し涙はくれば千代ハ子役を連れ向ふへ這入跡幕の内(四十郎)八右衛門出て兩人の 後姿を見て(八右)

石山で勝退を受し其爲は無沙汰で飛出し四月のら戦場よ来て居り升り勝利で勝國と成る夫迄い妻子は心ろい殘ませぬ(彌)通れ成る其詞他人の空似とや作まざるの時ハ影武者(八)エ(彌)サ、影日向あき其方ゆる堤みの見廻り致さんト彌兵衛八右衛門軍兵皆々下手へ這入跡上手より仙石權兵衛大谷慶松軍兵を連見廻りお来ると向ふより傳八の籠屋長兵衛出来り花道よて(長)何サマ隣お相違お高く高松城の水責は堤の上よ土俵を積此備へでい三家も近寄事ハ叶はずとら關所を通り若尾能本望をどげたい物と舞臺へ通るを軍兵ハ見て何れへ通る(長)私しハ京都油の小路北よ入る東角よて針間屋みすや長兵衛とヤ升る(仙石)シテ何れへ通る(長)商用にて博多町系屋正兵衛方へ仕入お参り升る(大谷)京地を出立なし何れへ止宿せしやト宿帳其外を調る事あつて後巡察使の御前よ於て調べんじ迷惑がる長兵衛を召連軍兵皆々上手へ這入と向ふ方(左四次)安國寺衣裳よて出来り(安)羽柴の備へ懸

固にして此高松へ寄事ならず敵將の年齢相親聞く處壯年の砌り都よて出會し面味は相違なく出家の身おれば見舞と号し探り見んと舞臺よ来るを軍兵ハ何れの者と若類を調んとする(安)御存分よト腰を掛るト道具廻る
○本舞臺高足の二重正面大形の襖白地の幕を張上下手矢來都て本陣陣先の体段(高助)羽柴秀長左右の下お仙石大谷居並び長兵衛を引据着類持物髪脇差其他を疾と調べ別段敵ハ問者よ非ずト關通門の印鑑を渡す長兵衛ハ悦び花道へ行掛るト其旅人調べ殘りの事わり差止へト正面の襖(右)開(四十郎)秀吉は片桐助作福島市松附添出て敵軍は座す長兵衛ハ余義無引返し下手よ平伏する(秀)長兵衛を見ておどくも旅人お出立能も巧みおつたな敵の間者と白狀致せ(長)驚きいくらお尋ねお成りましても京地の町人お相違ふりませぬ(秀)汝武家成しも町人姿に成よ付小額を廣くせし其印し左右よ背く殘れりどきつといふ長兵衛ハ胸くりし中分をする種々尋問の筋ありてト腹

差を取上る長兵衛驚く秀吉鞘を割と密書落る秀吉密書を
讀み亦怒る思ひ入る長兵衛の最此上りと密書を取ん
と飛上るを秀吉一刀抜打り切傳八の倒れる皆々驚く愛へ
安國寺と僧能越拜謁を願ひ升る取次(秀)如何成奴か
而會せんと立上る秀長は恐れ入りし休めて道具廻る
○一而平舞臺三方白地中形の襖切都て本陣客間の体愛
は秀吉上手は福島片岡其外秀長公の不調を能る秀吉許す
皆々次は立跡秀吉の密書を出し再見して(秀)正しく光秀
の自筆我君も逆臣の爲は無義の御生害己れ光秀主罪今
思ひ知れど双眼も浮び涙も憤怒の仕打愛へ案内は隨ひ安
國寺入来り秀吉を拜し悔りせし思ひ入(秀)陣中の見舞と
して參られし趣きあるが貴僧の初見參つてゐるよ(愛)
二十年前の事あれは御見忘れも尤先年京地三條の橋
よて君の相貌伺ひし賈卜者よて(秀)誠も我も小者の頃
石清水へ詣り歸るさよ橋の傍は披露よく園し見せの賈卜
者我人相を打詠の歎息かして居られし(安)モシ惡相よ

ていつらぬウトあんじられるも氣の毒と天下を握る吉兆
と初めて發言致せしが(秀)下郎の身ゆゑ僅うる謝物(安)
算木を授け我觀相の著く天下をとられし其時の是を印
お尋ねんと古き輪袈裟を差上しが(秀)飾る錦も七丈の袈
裟共かして返さん(安)詞違はず此中國へ探題の君とな
られし(秀)登庸(秀)修坊も昔しお引うへて賤しおらるる僧
とあり陣所へ尋ね来られし(安)廻り會し(是正)(秀)
實は目出度事共ぢやト互ひに悦び鐘櫃を袈裟を出し見せ
る(安)賈の問者も参りし事ゆゑ拙者此儘引取さんト云
ふ秀吉押止め機密を隠して毛利三家との和睦を頼む安國
寺の悦び承知する秀吉黄金を出して當坐の修報禮和睦の
上の貴僧のお望みお任せ修謝禮さん安國寺押戴き懷中
かす秀吉見送る安國寺向ふへ這入跡秀吉以前の密書を手
箱を出して見る愛へ下手秀長来る兩人思ひ入るよて幕
○三幕目高松城切腹の場 本舞臺常足の二重白木の高欄
修羅を卸し金張の襖後一面は満水の書割都て城内詰の丸

の体愛に水をおよぎ家老難波傳兵衛白井與三左衛門来り
主人清水は拜謁を願ふ侍女取次んと立上る處へ與より常
着よて(左衛門)清水長左衛門出来る兩人の主君の代り我
我切腹して和睦をなさんと願ふ清水の是を承知せず今朝
敵陣を送り越せし酒肴を催す問使をもてかき無益の最
期致すまじと清水の與は這入跡は兩人顔見合此上り此處
よて切腹せんと刀引抜突立んとぞ愛へ與(高助)與方
妻木出来り兩人を止める是よて兩人切腹を止り思ひ入わ
つて與は這入跡は妻木の涙だよく居る愛へ嫡子の月若
出来り父十機のお身代は此月若を切腹さしてと云ふ妻木
の其けあげを慈ひ十三年未滿よてはお身代り相成
らすといわゆる折しも上手修羅の内(松之助國太郎)家
老の女房子役兩人を運出来り敵將秀吉殿の人命を絶を好
まれを各々子供の人質を出せは和睦は成るとの事此事を
殿様よや上んと立んとする時イヤ參るよ及はずと與より
長左衛門宗春麻上下よて出来り座よ付今更助命致しては

毛利三家の守護を要書堅固の此城地大軍よて責るとも
防禦致さば其内には三家が援兵来るの必定と思ひに勝る
敵の智略此水責は掛りしも皆我が落度よして此度の和睦
の悦びしと云ふ妻木の涙にくれる折與よて下座の樂
の鳴物聞こへる皆々不審し止めんと立上るを宗春不審の
尤敵の送りし酒肴を以て腰元共へやし付し管弦の調へと
(妻)たとへ管弦を調べる其心の内の責敵と一同慈ひの仕
打宗春の不吉と怒る使者の到来と聞皆々與は這入跡下手
より(國十郎)堀尾茂助(權十郎)脇坂甚内丸舟は乗り軍兵
漕来るが宗春出向ふ使者兩人の上座に通る主人秀吉よお
いても貴殿の武勇をかしみ人質を差出され和睦の義を
し入れしお三家へ濟ぬと仰られ修切腹との事時刻も早け
れバゆるく修仕度かされたしと云ふ愛へ又與は妻木月
若出来りて慈く(脇)主従三世の別れ無や慈傷致されんが
(妻)お次は控へし者共一統涙よく居り升るト歎く宗春
の使者へ無禮と差圖のした腰元皆々酒宴の具を持出す

(宗) 逆盃なれば月若汝が子し父へさせと親子父夫別の
 盃づき取替し宗春使者も差出す堀尾頂戴致さんと盃を取
 り上るを宗春止め(宗) 予さへ目出度平和の酒宴未熟でム
 るが肴よ一トさ一舞ふて参らせんと扇を搦へ立ち上り
 「川舟を留ておふせの浪枕浮世の夢を見あらわしト下座
 の唄よきり」道の邊の清水流るゝ柳うげまばしが程の世
 の中は心留るごゐるのさるゝ舞事あつて使者の奥も休息
 する此内宗春の水色の上下を若のへ立出九寸五分を持解
 世の一首を出す使者の受取感心の仕打是より宗春禮をし
 て切腹する妻木月若りあしむ折しも奥方以前の家老難波
 白井殉死切腹して出来るを宗春見て無易の殉死致せしよ
 幸(兩人) 満水ゆゑ冥府へお供も少かお我々兩人と愁の別
 れの後(脇) 切腹見届けし上り各々生命の内お水を落す
 も冥府へ土産と以前の小舟も乗り建竹を打と知らせの恨
 煙も水次第も落る体まで二重一時せり上る是まで(宗)
 悦びさしも銃(皆々) 軍略じやあアト皆々別の場まで幕

○四幕目 羽柴方本陣の堀本舞臺一面の柵矢來白地の幕
 を張都て本陣外の体愛も高松城和睦の悦び酒を下されし
 とて軍兵四人酒盛をしてうのれ踊つて居るを見て大谷仙
 石來て今も毛利家よりの使者参るお付汝等ハ失禮を致
 すかとせいし門の内よは入る跡向ふより毛利の使者(團
 右衛門) 福原越後原本内記出来るを見て門内より淺野彌
 兵衛出來り案内して本陣に至る跡軍兵皆々平和踊りをし
 て悦び三番叟の鳴物笑しみの立廻りて廻る
 ○一面の平舞臺白地大形の襖都て本陣廣間の体愛も以前
 の使者兩人淺野大谷仙石控へ使者も應ずる折正面の襖を
 明け秀吉近習を供あして出座し再度の使者何用よひや
 (福原) 此程安國寺を以てや入れし如く伯耆半國備中の兄
 都川を境とさし和睦の趣意に奉れば承引是有る様書紙
 の神文持参せし(秀) 毛利侯より斯までよす越るゝ眞實の
 段感じ入なれ共實ハ此二月二日凶變ありしと和睦の返答
 (使者) シテ京地の凶變とすそ(秀) 外あらず主君信長公逆



臣明智光秀のためは當月二日の夜本能寺にて落命亦信
 忠侯も二條の城まで生霊遊ばされしありし秀吉大聲
 おびて駈入り一座の者胸もとろろ前後不覺のありさす
 使者の内心も悦び(使) 其慘傷慘察し此由立歸り主
 君へ言上りし又の評議を致せし上和睦の乞も參上仕らん
 と神文を箱に入れ左様ムれハ各々方の眼まとして立上り
 花道進行と(秀吉) 使者暫く待テ再三越されし和睦の
 凶變出來させハ照元殿を變ぐへ致されん此秀吉進も退
 進ハ織田家の下知も隨へハ手強も合戦もせざりしが今日
 よりハ我が指揮次第ハ屹度傳へられト初めの氣色も引
 かへハ氣勢も使ハ驚ろき退散する跡も一同進出扱も驚ろ
 入りたる都の凶變君使者も明し有し(秀) 都の凶變打
 悦び立歸りしハ兩人共大家の使者も似もやらず思慮の
 たらぬ奴じや(彌) 押寄來らハ味方の狼狽目のわたり君
 堅慮ムり升るや(秀) 燕雀何ぞ大鵬の此秀吉の心を知らん
 毛利三家の領國ハ我手も握りしも同然汝等氣だりふ事な

われ(皆々)毛利の頗る名將おれバ、ゆだんハ(秀)イヤ安眠さるんと手枕よて寝よると道具廻る

○毛利方本陣の場 平舞臺一而遠見の山組の張もの白地の幕を張敷草の上ハ(高助)照元(權十郎)其奉安國寺何れも陣立て兵士大勢居らび和睦吉報を待處へ向ふより以前の福原原本出来り大將の前ハ進み、味方勝利の吉端ヲ上ル(照)サ、味方勝利とすハ(福)涉神文持參よて蛙ノ鼻の本陣ハ參り秀吉ハ面會せし、悲傷の体ハて和睦承引仕兼ると申すハ、當六月三日逆臣光秀のためハ織田慶親子共都よて落命せしとす、味方の勝利と心得神文を持歸り候ハ付少しも早く、涉軍馬を進められたし(照)扱ハ信長猛威ハほこり信忠迄も一時ハ落命せし、味方よとりてハ宜ら機會といハせ、其悲傷さす付入陣の、相成らぬ(基)手前ハ於ても一旦約せし和睦されハ、信長落命さす共秀吉こそ織田家の代誓紙神文を受引候仰せ越れて然るべし(安國)ハ、ツ實ハ大國をまろしめと君慮め程かく

有るべし、勇あり義ある思召し(原本)悲傷をさす計りされバ我々迎も其儘立歸り仕らね、使者へ對して不禮の過言ト秀吉の大言を立る是よて照元基奉怒る又並居る臣等一統怒り少しも早く出陣有つて秀吉を討光秀ハ味方ハつて然るべしと、同音よ立る安國寺心配の仕打ハて中國泰平を口實として和睦を進むれ共照元基奉承引せず出陣と極り時しも幕の内よて其出陣無用よ存ずると(菊五郎)小早川隆景出来り(隆)一旦約せし和を破り此方ハ責寄ハバ不仁不義の名ハ退れず當家の恥辱又逆臣たる明智ハ組せん杯とい、鎌倉以來連綿たる名家の恥辱此末秀吉天下を掌握さす共當家の本領安堵をれ返つて逆臣たる光秀と喋り合せなバ、とへ勝利有る共未代迄も當家の涉恥辱よわらずや(照)サアそれハ(隆)兩人始め一同答ハ如何ハ(皆々)サア(隆)得と涉實感然るべきものと存ト升る(安國)隆景公の涉名論拙僧もサ上度事こそあり廿年前三條橋よて觀相を見天下を取るべき相ありし者あらんと問

者ハ入込見し處羽柴ゆゑ速ハ和睦然るべしト云ふハ照元基奉も其利ハ伏し安國寺を添役として福原原本使者として押返し參るべし(兩人)拜承して向ふへ遣入跡此義ハ付密談もムレバ其方共ハ次立て一同退散とる跡照元基奉隆景前ハ進む(隆)和睦整ひし上ハ秀吉當地を引拂、吊以軍をさすべし、光秀も亦秀吉歸國と聞カバ途中ハ待て合戦さるハ其節當家を吊合戦の味方として三千人の強兵を貸明智勝利と見る時ハ裏切さし秀吉を亡し其儘よ乘じて光秀を、當家一天下を納むハ此時ハありと此節の演詞わり三家評議の氣味合よて道具廻る

○本舞臺秀吉本陣の体愛ハ秀吉神文を讀居る福原原本兩人平伏し(使者)主人照元ハ於ても一旦約せし神文を持返りしと不興の仰ハ、即刻持參せし處、涉承引下され大慶至極よ存じ升る(秀)再度のお使、涉苦勞千萬殊ハ、吊合戦の涉味方として涉加勢の段、悉なく存ずる酒肴を獻せんト云ふと兩人ハ腹ハ手請立歸へらんと安國寺も立上り首尾

能く參りしと秀吉と思ひ入れあつて三人ハ向ふへ歸へる跡仙石權兵衛出来り只今先手の兵士ハ秀長公ハ隨ハ操出し、ましてムリ升る(彌)我君ハ此夕暮何國へ涉山馬(秀)汝知らずや問者を害せし節手ハ入し密書ハ都の大變知つたれ共味方の悲傷を思ひ告ざりし、此度和睦よて毛利家ハ味方の兵と云ひかして追討の難わらざる内一騎がけよて難波に走せつけ尼ヶ崎よて軍議をみざん者共甲冑持テ(助作)只今陣屋迄使者を送り出せし處毛利家ハ三千人の涉味方として押出し來ると覺へたり(秀)扱こそ追討來れるハ長政汝ハ毛利の人數を限り致せト此内秀吉具足を付て立上り我姫路迄ハ一統馬乘よて走せつけ(彌)君の涉出馬と知らせよ、誓の音する秀吉勇んで向ふへ遣入幕

○五幕目廣徳寺臺所の場 本舞臺常足の二重一間の落間都て寺の臺所の体愛ハ(新藏)所化薩淨納所珍戒(鶴藏)の天窓をそつて居る(權十郎)下男幸助風呂の下を焚付笑しみの演詞の處ハ(高助)百姓太郎助(團太郎)の女房(松之

助) 太郎作の女房 倅太郎吉を連れ出来るを幸助見てナ
太郎助どの宜く寺参りも来られました(太) 今日少し
志しの佛事あり参詣致しましたと云ふ幸助先女房
二人子役を連れ参つて来升と上手に這入跡納所珍戒
が太郎作の後家千代を周旋として下され頼む太郎助
の物りし(太) こんき浄納所をお置成る浄住持の賑多心
配事であらう(珍) 馬鹿よしあるな住持がこねて仕舞
へバ此坊主の丸取と此時障子を明(門藏)の住持出来リコ
レ珍戒何が丸取りとや(珍) ヤア南無三三三ト薩浄眉毛
を片々落されしを手水盥も寫みて障子の内へ這入跡(太)
大恩請し信長様の侍供養又弟太郎作少羽柴様の組に出討
死したと申事お承法事を願ひ升と信長も恩を請し筋を
断す折しも以前の女房二人子役下男幸助歸へり来り手傳
つて米をさがし味噌を摺り千代の夫太郎作の死せしを味
噌をすりかきから歎く(薩) ヤア摺子木を持って享主を思ひ
出し泣て居ると笑しみの事おつて道具廻る

○西之宮枝道の場合 平舞臺在郷遠見の書割夏草の茂りし
体愛へ向より(關十郎)身代の秀吉甲冑馬乗で出来り(秀)
道普請と見せつけ中國よりの引返しを待もふけたる明智
の奸兵左右(敵)ららし駈援し名馬の助け去り乍此枝道
の廣徳寺の行留り歸れば又もや取圍さんハテなんとした
物ト見渡す向ふ(左圍次)横面冠者何れへ行く但馬見参
せん(秀) 扱こそ名代の四王天退る、道もあらざればと馬
を下り馬の頭を向ふよむひけ尾筒へ小柄をさす馬ハ荒れ出
して向ふより来る四王天は飛掛る此邊は秀吉の上手は遊
る跡四王天の花道よて馬と取組かから本舞臺に来てエ、
己れのためは秀吉を見失ひしと怒り馬と深田は打込伴は
て此道具廻る

○本舞臺元の寺臺所の体愛は珍戒お千代の手をとり挑む
お千代は怒り摺子木よて珍戒を打珍戒はお千代を縛し猿
轡をさせ押入は押込扱是のらひ遊支度だが片眉毛での
片側町を遊ねばあらぬと以前の剃刀を出して眉毛を剃て

奥へ這入ト愛へ秀吉遊来り跡から這懸来ぬ内は宜い隠れ
所があればよいがト下手の湯殿の内へ小隠れをする珍戒
の單物丸くけ帯を持つて出来り二重へ隠是から旅用の
金をサ、和尚が時へをせしめて呉んと又上手は這入秀吉
又出来り鑑と兜をとり共に井戸は投込跡珍戒が置し着物
の内より白の單物と丸くけの帯を取り出し湯殿の口へ思ひ
入つて有合ん砥石と剃刀を持湯殿の内へ忍ぶ愛へ又珍
戒金包を持出来て押入を明品々を隠して居る愛へ以前の
四王天鎗を持出来り此足音は珍戒胸りする(四)コレ只今
此寺へ落武者の駈来みしからん(彌) イエ此處へは参りま
せん本堂よても(四) 然れば本堂へ案内致せト珍戒先は四
王天奥へ這入ト繩すだれは秀吉顔を出し此間お天窓をそ
らんと内へ這入ト上手より太郎助と女房出来り妹のお千
代の何れも行しやと尋ねて居る愛へ四王天先に和尚珍戒
薩浄幸助出て和尚の二十兩紛失せしと駈く四王天の押入
を明ると云ふは珍戒の明られてハ大變と是を拒む四王天

い怒り石突よて戸を突破るト内かお千代繩の儘出るよ皆
々驚ろくお千代は珍戒お縛られしと云ふは珍戒の遊出す
四王天はせつ込戸棚は居ぬハ床下始めアノ風呂城を詮議
せんト云ふ折しも坊主天窓の秀吉風呂を遊出と四王天此
体を見て這掛這入幸助薩浄も這懸行跡は和尚の金の包
を持太郎助夫婦子役を運障子の内へ這入跡坊主の秀吉遊
て来る續いて薩浄幸助這懸来て立廻りの末秀吉を同人共
這懸上手へ這入ト以前の珍戒出来り鍋墨をとり眉毛は付
味噌を摺て居ると又四王天出来り猿面覺期と鎗を付る珍
戒の驚き手を合せお助けくと拜む是は四王天諸方を探
し奥へ這入ト愛へ太郎助が来るを見て珍戒の上手は這入
太郎助も續いて這懸這入跡秀吉出てうしろ向ふて味噌を
摺て居る折しも四王天出来り(四) 跡々おて見當しから門
外へ知らせよと云ふ捨向ふへ這入跡太郎助出来り珍戒め
動き居るると坊主の秀吉を見てヤ、淨身の太郎作とふし
て愛は(太郎助)此度秀吉公の淨身代の役を勤めし上の淺

野侯の身内どかりナふが淺野八右衛門とあると聞か振も
出来り出世を悦ぶ皆々嬉しき仕打よて道具廻る

○本舞臺正面石段此上は赤塗の門都て廣徳寺門前の休愛
(權十郎)加藤虎之助鏡形りよて兵士六人を相手よ立廻
りト軍兵の左右へ送還入此時門内か四王天出来り(四)
虎之助宜も是迄参りし明智將軍の命よより此處お待受
今秀吉を討取たり(加)汝如きは討れんやと双方鏡の立廻
りとなり四王天ト鏡を授給細討となり加藤四王天を組
伏繩を懸り四王天は是迄と秀吉を此寺中へ還送し天運
強く逃失し坊主よしたか降参させしも同然ト聞より扱
は君よい御別變さされしかト云ふ折しも門内より八右衛
門先よ千代太郎助出来り大將と見せたる誠の長政
の辨持役(加)誠よ汝の八右衛門扱の面体似たるより身
代よ立ッたるか(四)坊主よせしと思ひの外計略で有りし
か武門のささけよ繩を解切腹させてくれ(加)如何よも
望みよ任せんと繩をどくと以前の珍飛黒面よあり出来る

を授けて四王天鏡を脱切腹するイヤノ介錯(加)心得た
四王天引廻す此機機時の鐘めて拍子幕

○二番目 女化稻荷月朧夜

岸幕常州浮島ヶ原の場 本舞臺上よ寄社廣野の遠見都て
在方遊獵の休愛よ百姓三人遊獵止の札を建て居ると(松
助)半羅九郎兵衛出来り庄屋よ札立の延引を責る愛へ若
伎子役千代松を引立来る殿のお供先を切し不埒お幼童
と半羅切捨んとする處へ其手打無用と向ふ(八
百藏)信田家の巨儀貝左市郎出来り止める跡領主(家橋)
信田左門正(圓十郎)家老荒川道之助其外供廻り出来り左
市郎の止めしを責子役を糺す徳臣神影流の達人曾根忠三
郎の悴と知れる愛よ悴の不禮と愛(高助)忠三郎出来り
荒川の扱いよて目見得をし信田家を親共の御願ひし
其後は常陸國信田郡根本村の農民と成りし件をよ上る殿
の悦び九郎兵衛と試合す付る同神影流の試合拜見せん一
同の進めおむりし武術も致せしご當事ハ百姓試合ハ

許下されと危るを牛窪の口首を履も苦しと思召達て試合
と好まれる忠三郎是非なく立合お掛るト九郎兵衛の急病
ありとて其場へ倒れる是よて牛窪の門弟一同忠三郎よ打
て掛る立廻りの末敵役打せられる牛窪の門弟お介抱さ
れ此場を立退跡(殿)牛窪病氣全快の上り重て試合す付る
間神影流よ有り非ざるかためし見んと忠三郎よ内意をす
付られ小鳥の囀り宜き得者を得しと立上る浮師爺ト呼立
道具廻る

○同潮来玉屋の場 舞臺一面の輔臺玉屋と記せし暖簾の

出遣入口都て遊女屋見世の休愛へ(權十郎)若イ者お遊女
立廻り居る愛へ地廻りの若衆通り行跡辻裏や来る遊女の
種々の辻裏を見て悦ぶ愛へ牛窪九郎兵衛同役四名と出来
り(荒次郎)若者案内をして二階よ通る跡(家橋)小山真三
郎流着風ふて出来る續いて(菊之助)若徒信三附来り真三
郎の遊びを止める愛(松之助)遊女お玉與が出て真三郎
の手をとり連れてゆく件よて道具廻る

○同玉屋二階廣間の休愛よ牛窪九郎兵衛諸士四人遊者を
揚酒宴をして相方お玉の出て来ぬを怒る皆々止る愛よお
玉出来り牛窪を責める跡(菊五郎)中間彌三平上り来り金
の無心をする牛窪の度々の無心と怒る彌三平の懐中お密
書を出し掛るお牛窪の驚きせしお玉其他を遣ける(彌)
私しを見掛て頼みなすつ信田の邸の藏破り神影流の傳
書が手よ入其ためよ今じやア立派お師匠番モシ金を貸
てもよりろよ此助の掛合よ牛窪も悪事の加人としうた
がやく五兩を貸渡す彌三平ハ不勝へ金を請取牛窪諸士
の各々遊女の部屋よ行跡お彌三平ハ五兩の金を出しお玉
を相方お出して呉ると云ふ若イ者ハ皆々困る彌三平ハ主
人よ掛合とて下へ行跡小山真三郎出来りお玉と密會して
五拾兩の金を遣ふんとする處へ若徒の信三出て其借金ハ
母上の多大切の金ゆ多遣ていお止まり下されと諫言
するお玉ハ大恩ある若老母の金子を頂戴して済ません
と返す信三ハ悦び金を桐箆よ納めお先へ参り升ると歸る

彌三平ハ此斷し立聞けた玉ハ逆も此世で添れぬと死
 の覺期ある眞三郎も共死なんど互忍ぶ愁歎を(左
 團次)お玉の兄下部眞三郎此地場出大恩ある主人が妹
 と情死杯成されしして大旦那様に相濟す此度殿様方の
 仰付ふて伊家老荒川様の御娘との御婚儀ハ後世の實れ
 妹を思ひお切成され御祝言を願ひ升又お玉も若旦那と思
 ひ切つて呉ると願是めて兩人承知する眞三平ハ悦ぶ兩人
 ハ別れを歎く(眞)又の時節を樂しみ(玉)美事ハ別れる
 今夜の二人(眞)親孝道兄への義理とお玉ハ膝もとどがり
 泣(眞)夫が未練と互ひ見合し此道具廻る
 ○本舞臺低き土手潮來川を遠見の書割愛へ以前の信三出
 来る跡より彌三平運掛来て懐中にある五拾兩の金を渡せ
 と追信三ハ悔りし金をとつと土手置(信)メヤ金杯ハ
 持たぬと(彌)今玉屋の二階で白眼だ睨まざりく渡せ
 と信三の懐中を探しヤメ奴の金をとつたおヤメ有家を
 白狀しろト打擲するト立廻り信三逃出すを引捕へ石

よて信三を打殺すと愛へ上手も以前の眞三平跡を眞三郎
 出て三人無言の立廻りの末彌三平ハ花道を廻る眞三郎は
 金を拾ふ眞三平の跡を見る件よて幕
 ○二幕目根本村會根宅の場 本舞臺都て農家の造り下手
 田前を見たる書割曾根三郎宅の体愛は百姓兩人人相見
 を運て来て見る老母おさ々と娘お菊の人相を見て此内の
 八年跡方不淨の障有るゆゑ開運せぬと云ふ母の氣よす
 る愛へ忠三郎女房(菊五)お秋歸り来て忠三郎が領主へ召
 されし夫の歸りを案卜る人相見ハ天眼鏡を出して人相を
 見て進せんと進み来るをお秋ハ驚き遠而斷り顔を隠して
 千代松を運て奥に這入ハテ不審の相と人相見ハ百姓が連
 歸る跡お秋ハ出来り母の肩を揉みながら今の人相見ハ此家
 よハ汚れが有ゆゑ夫の出世が出来ぬと云ひしを聞是が別
 れも成るうと涙よく居る愛へ(高助)忠三郎歸り来り今
 日領主は召れ牛瀧九郎兵衛と試合をせし處打負たりと斷
 す母女房の扱ハ人相見のせし如く汚れ障りが有ゆゑ試



合も負しうと歎く處へ(團十)荒川道之進羽織袴大小
 よて出来り忠三郎お而會し本日試合勝べきを牛瀧ハ勝
 を讓し何か子細ゆらんと殿々内密の仰せよ付態々罷越
 たり(忠三)拙者未熟ゆゑ負し相違か(荒川)承知せず
 先年貴殿の父方神影流の極意の一巻殿ハ献上せられしを
 寶藏へ入置し處賊ハ盗されし牛瀧こそ其賊あらんと
 存するゆゑ再度の試合ハ牛瀧の術をた試し有し上主家へ
 歸參成れたし(團十)試合の勝負お勝歸參する其時の心

悪き九郎兵衛無念お思ひ手前が命を絶んも知す左有る時
 ハ伊家の騷動母への不孝夫の怨と勝を譲りしと云ふ母
 と女房ハ再度の試合を願ふ荒川ハ承諾し後日の事を忠三
 郎ハ密談し向ふへ歸る母ハ子供兩人を運て納戸お這入跡
 お秋ハ八年此方運進し忠三郎お別れをおしみ涙よくれる
 (忠三)今歸參の時よ至り愁歎するハ何事ぞ(お秋)是ハ登
 く持病の血の道立場へ參り藥を求て參りませと千代松を
 運是が夫の顔の具納めと愁の仕打て向ふへ這入跡母が

出来り今人相見の嘶しよの八半跡の家汚れが有ると云
ひしを聞か秋の櫛子の變りし何か子細がと親子氣味合
の仕打ふて此道具廻る

○本舞臺真中覆の立木一面芒原此後原中の遠見都て根本
夕原夜の体時の鐘よて幕明「嵐吹根本ヶ原の一甲塚心引
きく道野邊の鳴子の音よ驚うされどお秋千代松を連出来
り顔へ手拭を常泣を見て(千)かゝ様喜んで泣のトや(秋)
是が泣す居られラコレ千代松よう聞や此母の人間から
す八年跡狩人よ既よ打て死ぬ忠三郎様よ助られ其恩返
しよ靈場を廻る順禮と姿を化一夜の宿を借一處母の傍
病氣男一トツの看病を助んためよ逗留きし庄屋の情よ嫁
どまり夫婦と成しも八年越二人の子迄設しゆえ疾よも古
郷へ歸べきを子の恩愛よ引されて仇に月日を送しが「夕
アの床々名残よていとしい夫可愛い」我子よ別れよやア
あらぬ(千)かゝ様泣と坊も悲しい(秋)お情深き母様へ
思も送らす古巢へ歸り升たる跡二人の子供を願ひ升て我

家の方へ手を付て伏拜しコレ千代松母様の違ひ國へ行ぬ
ハあらぬ利口者じや早く歸りや(千)私しや狐が出るから
獨でいこはいいやトや(秋)親を狐と知り子供不便の
者やと歎きけふサ、狐の來ぬ内早く行やとすうし宿める
千代松の泣々花道よ應るお秋の今夕別のび上る又千代
松かかゝ様と歸り籠を(秋)サ、早く千代松のシツ
泣よ姿を願し驚して内へ歸そうか夫より此身を隠さんと
立上る折しも木蔭よ同ふ(忠)サレマテ女房影を隠さバ
二人の子供が不便ゆえ狐で有る共待ツてくれ(秋)八年此
方隠たる素性を明せし上うらゝ最早面の合されませぬト
留る袂を振拂ひ大ドロくよありお秋の穂芒の茂みへ飛
入ふ千代松のかゝ様く追掛泣忠三郎のお秋の別を思
ひ歎悲む折しも(母)小影で不殘聞ましたが扱ひ嫁女の此
原で(忠)八年跡助し恩を報んため(母)姿をやつして妻と
あり母が看病して呉しか(娘)かゝ様顔を見て下され(忠)
子供便と思ハ今一度姿を見せてと呼狐火諸方お立ッ

ドロくよてお秋願はれる二人の子供左右を取とぐる菊
五郎白毛の着付とありドロくよて狐火と共よ立木の内
よ煙りと消るト幕

○三幕目信田家辻番の場 本舞臺正面辻番左右練堀爰へ
火の廻り通し跡半窪九郎兵衛出来り辻番人よ用を付使
よ遺跡上手を彌三平出来り永々日那の世話よ成ましく
か生々へも有ません故死お升ると空泪を滴しまはくくと
云半窪の死のの應て何國へ成共行が宜と拾両出して渡す
彌三平の殿き是うら上總木更津村で漁師の網七の處よ落
付升る(牛)此一巻の此程の試合より傳授の賊の己ど荒川
が察せし様子所持して居ての而倒ゆゑ其方お預る間(彌)
儘よ預きした(牛)何れ其内尋て參と半窪下手よ遁入(彌)
此後思ひ死でも忘れ致させんト後ろ姿を見て空泪ではめ
込だら十兩どの有難へ是うら潮事の玉屋へ押しお玉を
落してへ物と願冠をして花道よ應る向ふ眞三郎出来り行合
互お不審の体眞三郎本舞臺よ來て今の儘よト道具廻る

○藩中小山宅の場 正面襖上手床の間表よ小山眞三郎と
札を掛都て郎長家住れ体爰に眞三次下女お眞三郎が玉屋
へ又々行し事を聞此上ハ妹お玉を殺より外よ手段のない
と考て居爰へ眞三郎歸り來と眞三次の見て意見をする眞
三郎の昨日お玉の方々文が參し故是非なく參し處我が荒
川どの婚禮を聞是迄の縁を切ため取替し有起證を返たる
か此方かも返て來とお玉が兄眞三次への手紙を出し見せ
る眞三次の手紙を見て全く思切しとの文面よ悦ぶ亦神影
流極意の一巻を盗しも潮來川岸で信三を殺せしも彌三平
との胸故早く敵を取て遣とふムり升る(眞)只今道よて行
合しハ彌三平お相違なしと聞か眞三次ハ跡遺懸て打捨く
れんと刀をつとり兩人立上ると道具廻る

○本舞臺潮來玉屋廣間の体爰よ(菊五郎)彌三平藝者其外
女を相手よして酒宴の處へ(お玉)出来り彌三平よ懸情せ
し仕打よて半窪さんのお逆よ二階にお出の共時から彌三
平さんよ惚たれと半窪さんの湯家來故幸抱して居た處半

さんハ道の道に於ける今夜の嬉さと誘へ寄添る彌三平ハ
嬉しき人にて子供大勢や呼潮来踊りを踊せ自分も踊潮子
のド、逸を明ひ(皆々)笑みの盡盡しあつてト媒人の背
の内だから私等ハ開は仕升と皆々廊下に出跡よお玉ハ
彌三平ハ色合の仕打在り彌三平ハ一巻を盗みし事を断す
(お玉)夜明頃又連れて出て女房おして下ださんせと旅用の
都合をするあら少待て居てト廊下は出跡彌三平今夜ハ
何だろ薄氣味の悪い晩だト四方を見廻し身振をする折
ロ、成侍三の亡靈出彌三平ハ驚き助て呉るト逃て一
巻を振廻すト亡靈ハ無念の面ざしよと消る跡以前の子供
が來が皆々三ツ目子僧お見得る彌三平怖りして氣絶する
ト下手よお玉出來り一巻を取り押頂戴ドロ、よて消る
ト此道具居處よかはる

○本舞臺二重の堤上下世原 傍よ石地蔵都て潮来堤下田
前ハ体愛ふ四ツ手親を明(彌三平)人目忍んで駕乗上總
へ行氣で出掛たが今潮来のお玉ハ惚られたハ扱ハ狐ハ化
されたのをお玉と思つたハ石地蔵又幽霊ハ掛稻か其上よ
一巻と賣つた金の十兩も紛失したと探す折小影より出る

以前の(與三次)彌三平向を尋て居る(彌)扱ハ一巻の手め
ハが盗んだな神影流の極意の一巻(與)紛失した其一巻持
て居るららの手めハが盗んだな(彌)チ、三年跡ハ牛鹿の
ら盗んで呉ると頼まれたが盗んだ事を云つたらハ生し
てハ置ねへぞ(與)一巻さう、渡して仕せへト此跡の長
河詞あり兩人立廻りの末上手ハ道人ト糶屋兩人金を拾兩
拾つたど悦び籠をかつぎ下手ハ這入跡牛鹿先ハ四人の敵
役出來り荒川ハ一巻の賊と知られしゆ是方上總ハ落ん
と一統立上る愛ハ曾根忠三郎出來り極意の一巻拙者ハ渡
し絶え懸れ彌三平の落せし証據の手紙を出して追る是
方五人を相手ハ切合お成り狐火助ける四人の敵ハ遊る牛
鹿ハ當られる愛ハ彌三平を追懸與三次出來り(彌)暫時待
つた兼預りし一巻ハ盗まれたり(牛)何一巻を盗まれた
ト此内狐火諸方ハ燃るト千代松一巻を持出來り(千)母様
が是を交様お上るどすされた(忠)ヤ、女房お秋ハ影
身ハ附添此一巻を取得しか(彌)扱ハ狐ハ化されたのか
(與)傳書の一巻再度もどり(牛)狐の仕業であつたの
(忠)ヤ、有難やト一巻を押戴さ先此扱ハこれさり